

在宅医療検討部会ワーキンググループ活動報告

1 設置目的

24 時間在宅ケア体制の実現に向けて、多職種連携等の取組内容を検討する。

2 構成メンバー

(別紙)のとおり

3 実施日及び主な内容(3回実施)

	実施日	主な内容
第1回	令和6年9月2日(月)	多職種連携の構築に向けた課題、多職種連携で取り組みたいことについて意見交換を実施
第2回	令和6年11月26日(火)	第1回の意見を踏まえ、「制度の狭間にいる住民へのアプローチ」及び「見えないカベ」の問題についてグループワークを実施
第3回	令和7年2月26日(水)	第2回の意見を踏まえ、孤独・孤立の問題に必要な取組や区民に在宅療養の取組を分かり易く伝えるための工夫についてグループワークを実施

4 活動概要

(1) 第1回ワーキンググループについて

意見交換を行う中で、以下①～⑦の論点が整理された。

①	在宅医療・介護連携は相当程度進んでいるが、連携の中で「すき間」が無いのか
②	MCS の利用に関するルールの検討
③	制度の狭間に埋もれた方も多く、制度サービスだけでは対応できない地域課題へのアプローチ方法
④	地域の中で、介護保険制度の理解や障害者理解の取組を推進(事前の制度理解)
⑤	「(住民間の)見えないカベ」を崩すために、住民の生活の場へアウトリーチする等、専門職と住民の顔の見える関係の構築
⑥	災害時も見据え、ハイリスク者を地域で把握できる体制づくり
⑦	職種間の仲間意識を高める(他職種業務への理解・共感)

(2) 第2回ワーキンググループについて

第1回で出た論点の中で、③「制度の狭間」と⑤「見えないカベ」について優先的に意見交換を行った結果、以下の課題が浮き彫りとなった。

「制度の狭間」にいる住民へのアプローチ方法	住民間の「見えないカベ」問題
・制度の狭間に陥っている方は、「人」とつながらず、場合によってはセルフネグレクトの傾向も出てくる。 ・セルフネグレクト状態になると、心を閉ざし、<u>孤独・孤立に陥りやすくなる</u>ことが考えられる。 ・<u>関係機関、専門職、地域支援者が連携し、そうした方の心に寄り添い、隙間を埋め、社会資源とのつながりを作るアプローチを検討する必要があるのではないか。</u> ・「ここに行けば情報が得られる」といった<u>情報のプラットフォーム的な場所が必要。</u>	・知らないことで偏見が生まれてしまう。介護や在宅医療に関する十分な理解を得るため、多世代に対して<u>様々な方法による周知啓発</u>が必要ではないか。 ・子どもや若い世代も含め、例えば<u>認知症や障害の有る無しに関わらない「包摂的な場」、多世代が集えるような「ごちゃまぜの場」、「身近な地域で相談できる場」の整備</u>も重要ではないか。 ・支援者は、垣根を外すために支援者という肩書を取り、一人の人間として地域に入っていく姿勢が大事である。

(3) 第3回ワーキンググループについて

浮き彫りになった課題に対して、事務局で以下の①、②の通り中長期的に目指す取組の方向性を取りまとめ、③の論点に沿って意見交換を実施した。

① 2040 年に向けた在宅医療・介護連携の「共通の方向性」

- ① 多世代の方に介護や在宅医療に関する制度理解が一定程度浸透していること。
- ② 区、関係機関、医療・介護等の多職種、地域支援者との連携の充実を図り、地域で支え合う体制が確立していること。
- ③ 医療・介護が必要となった場合も可能な限り在宅で安心して生活できるよう、看取りを見据えた 24 時間在宅ケア体制を実現すること。

② 共通の方向性を踏まえた、5 年後の「具体的目標」

【具体的目標①】

孤独・孤立の問題が顕在化している状況であることから、保健・福祉・医療の知識を持った専門職や関係機関が関わり、社会参加等につなげていく伴走型の生活支援を推進していく。
さらに、区、関係機関、地域の保健室、各専門職、地域支援者等が連携・協働し、地域の社会資源とのつながりの充実を図り、包括的な支援体制を強化する。

【具体的目標②】

区民の間で、介護や在宅医療に関する十分な理解を得ていくために、既存の「知って安心『在宅医療・介護支援ガイドブック』」について、在宅療養のイメージが付きやすい内容に見直しを行い、多世代の方の意識を醸成する。

③ 在宅医療・介護連携推進に向けた論点について

【論点1】多職種及び地域支援者が連携して伴走型の生活支援(伴走支援)を実践するために必要な取組は何か。

- ☞ 一般的に地域のつながりの希薄化が問題とされるが、力を持っている方はたくさんいる。区民間の横の調整は難しいので、専門職が仲介し対等に関わることが求められるのではないかな。
- ☞ 専門職同士の連携はある程度できていると思う。むしろ、住民同士が互助的に関わり合えるシステムが町会単位の規模で構築できると良いのではないかな。
- ☞ 支援者に、活動支援にとどまらず、生活全般をサポートしていく視点を持ってほしいが、なかなか難しいため、住民側にかけ橋となれる存在を醸成できるよう取り組んでいる。
- ☞ 住民からの情報が自然発生するような場所の整備が必要ではないかな。
- ☞ いきなり伴走支援を説明するのは難しく、支援しているうちに自然と気かけられる存在になるように意識醸成が必要ではないかな。
- ☞ 地域に身近なところでかけ橋となる人材をつくり、住民をつないでいくことが一層求められるのではないかな。

【論点 2】多職種及び地域支援者が連携して社会資源とのつながりの充実を図るために必要な取組は何か。

- ☞ 転入者が多いが多世代で関われる機会が少ないため、多世代で触れ合える環境整備が必要ではないかな。
- ☞ 包括や拠点が各地域に整備されているが、住所によっては遠い方もいるので、町会単位で相談できる場が必要ではないかな。
- ☞ 地域にあるお店や喫茶店と連携することで気軽に立ち寄れる居場所ができるのではないかな。
- ☞ 住民自身が制度を理解することや自ら自分や家族のケアを実践するなど、身近なことから始

められると良いのではないか。

- ☞ 町会と協力し、「防災バリアフリーマップ」を作成した際、区の資源を把握できるだけではなく、災害弱者への目線を持つことが出来た。乳幼児連れの親子や聴覚障害者なども入ると、更なる仲間づくりにつながるのではないか。
- ☞ 地域の近くにあるのに把握されていない地域資源が多々ある。住民が気軽に入りやすい集まりを作っていく必要があるのではないか。
- ☞ 自発的に地域の見守りを担っているお店と連携できると良い。そうしたお店は、地域住民が良く知っているのも、住民に情報収集をするのが良いのではないか。

【論点 3】区では『在宅医療・介護支援ガイドブック』の見直しを考えているが、区民に対して介護・在宅医療(在宅療養)のイメージをわかりやすく伝えるために必要な工夫は何か。

- ☞ ガイドブックについては、「末期の場合」、「認知症初期の場合」などといった具体例や症例等を紹介すると関心を引くのではないか。
- ☞ 対象者を広げ、ライフステージにおけるサービスの流れを簡単に示す(子どもから介護必要時まで)。本格的に介護に関わる前から知る必要があるのではないか。
- ☞ 地元の医師や薬剤師から直接伝えていくと身近に感じられ、区民の意識向上にもつながるのではないか。
- ☞ 制度を一から説明するのではなく、「〇〇さんも最近サービス使うようになったよ」と具体的な例をイメージさせると制度理解の近道になるのではないか。
- ☞ 医療・介護が必要になる前から「在宅でも過ごせる」ということを視野に入れてもらうことで退院支援も円滑にいくのではないか。

【その他意見】

- ☞ 住民同士で協力し合う意識がそれほど感じられないのが課題。意識のすき間を埋めることが必要ではないか。
- ☞ 外国からの転入も多く、多国籍の方が言葉や文化が異なり、いざというときに弱者になる要素がある。こういった方も含めて孤立防止対策を考えなければならないのではないか。
- ☞ タワーマンションでは、孤独死問題も出てくるだろう。互助にどこまで頼るのか課題ではあるが、ある程度住民同士で助け合わないとやっていけないのではないか。
- ☞ がん末期の方の中にはおひとり暮らしの方も多く、患者さん同士でつながりたい方も居るため、患者交流会を広めていけると良いのではないか。
- ☞ 防災訓練に参加するメンバーが固定化されているため、新たな人が入ってこられるような仕組みづくりが必要ではないか。

(4) 活動のまとめ

- 多職種連携の更なる推進を目的に立ち上げたワーキンググループであったが、医療、介護、福祉の専門職のみならず、学識経験者や地域支援者も含めて活発な意見交換が行われた。
- 意見交換を通し、MCS の利用推進など実務上の課題のみならず、地域には制度の狭間に埋もれ、制度サービスだけでは対応できないケースや、(住民間で)見えないカベが存在している事例など、より地域の生活の実情に即した課題も認識した。
- このような課題に対し、ワーキンググループでの意見交換の内容を踏まえ、事務局において、
 - ①『2040 年に向けた在宅医療・介護連携の「共通の方向性」』
 - ②『共通の方向性を踏まえた、5 年後の「具体的目標」』
 - ③それを目指すための論点を取りまとめたところである。
- 引き続き、令和7年度もワーキンググループを設置し、意見交換を行うほか、目標に沿った具体的な取組を進める予定である。

5 今後の予定

令和 7 年度も継続してワーキンググループを開催予定である。

令和 7 年度は、目白台地域において東大グローバルナースングリサーチセンター(GNRC)が「看取りを見据えた在宅医療・介護連携推進事業」を実施するため、当該事業の進捗状況も踏まえた意見交換を行う予定である。そのため、令和 6 年度と同様のメンバーで意見交換を行うこととする。

なお、令和 7 年度は、6 月頃を目途に第4回ワーキンググループを実施予定であり、7 月頃開催予定の当該部会にて報告を行う。